

昭和萬葉集

昭和四十二年～四十四年

卷十五

講談社

昭和萬葉集 卷十五

定価 一、六〇〇円

昭和五十五年三月二十八日 第一刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一二二

郵便番号 一一二

電話 東京〇三九四五一一二二(大代表)

振替 東京八一三九三〇

印刷所

凸版印刷株式会社

製本所

牧製本印刷株式会社

用紙

東洋クロス株式会社

王子製紙株式会社

製函 株式会社岡山紙器所

©講談社 一九八〇年 Printed in Japan

0392-441151-2253(0) (昭萬)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

昭和萬葉集 卷十五／目次

口絵
凡例

I

ゲバルトの季節

安田講堂の攻防

われらの痛み

親なれば歌う

シュプレヒコール

投石・火炎ビン

催涙ガス

ヘルメット

規制する側から

市民の目

ジュラルミンの楯

逮捕

事終りて

学園で

団交の席で

会議

学園封鎖

破壊された学内

教師の声

教師の妻

昭和元禄

人類月に至る

公害・大気汚染

十勝沖地震

新空港

時の話題

時の風俗

ブラハを思う

沖繩で

生活の歌

III

都会に歌う	66
生活の歌	69
ある光景	73
ある時	75
朝	78
街上にて	79

夕暮	81
夜	83
厨への歌	86
生活の周辺	88
車中にて	90
選挙	90

ベトナム戦争と国民

北爆への怒り	92
反戦への行動	93
ベトナムの少年兵	97
声なき民	98
兵站基地・日本	100
ベトナムを思う	101
エンタープライズ阻止	103
王子野戦病院	106
基地の町にて	107

戦争の傷痕

『原爆歌集ながさき』より	109
被爆の記憶	110
原爆の傷跡	112
還らぬ人々	114
戦没者叙勲	116
戦場体験	117
銃後にありて	118
引揚と抑留	119
戦いのあと	120
わが戦後	122

IV

農村の日々

農家の現実	126
果樹園	129

V

愛と死

青春

愛の歌

父母

父母の死

父母を偲ぶ

176

181

183

186

188

仕事の歌

海で

山で

炭坑・鉱山で

工事現場

大工・石工

鉄道員

職人の歌

140

142

143

146

148

149

151

米作り

農作業

農村の日々

家畜

農業

130

134

137

137

139

はたらく人々

職場にて

合理化の波

工場で

出稼ぎの歌

定年・退職

165

168

169

172

173

セールスマン

商いの歌

教師たち

医師・看護婦

鍼師・指圧師

仕事の歌

153

153

156

159

161

162

夫婦

再婚・離婚

嫁・姑・舅

船員の妻の歌

夫の死・妻の死

老境

みどりご

191

194

195

196

198

201

205

わが子

206

病む子

209

亡き子

210

成長して

212

祖母と孫

214

兄弟

216

師・友

217

病み臥して

219

療養の日々

222

手術

223

癌

227

不自由な体

228

ハンセン氏病

229

死後を想う

235

四季の移ろい

春

230

さくら花

233

夏

237

秋

240

冬

243

雪

246

歳暮・新年

247

自然の姿

日月風雨

250

山

253

海

256

水辺にて

257

鳥

260

動物

261

花・草・木

263

くさくさの歌

歌会始

268

旅

271

寺院・仏

275

海外の旅

278

機上にて

279

外地に歌う

286

獄中にて
ふるさと
女心
読書・学芸

277
278

281

過ぎし日を
日本の民俗
日々の感慨
わが想い

287
285 283 281

短歌における内向化〈昭和短歌史概論〉
大学闘争の波〈昭和史私論〉——山田宗睦
年表
作者略歴・索引

292
298
308
311

脚注目次

〈ゲバルトの季節〉
ゲバルトの季節
安田講堂の攻防
安田講堂封鎖解除
全共闘
立看板
「キャラメル・ママ」
機動隊の装備
カルチェ・ラタン

10
12
13
14
16
17
23
24

大学問題懇談会
大学臨時措置法
〈学園で〉
高校紛争
学園封鎖
大学の研究室
沖繩デー
大学の自治
〈昭和元祿〉

32
33
36
37
37
40
44
44

人類月に至る
昭和元祿
公害・大気汚染
サリドマイド
十勝沖地震
成田空港問題
沖繩主席選挙
B52配置と基地公害
チェコの自由化とソ連の弾圧

48
49
54
55
56
57
58
59
60

フーテン・ゴーゴー・シンナー
ケネディ、キング暗殺
三億円強奪事件
心臓移植
〈生活の歌〉
団地・ニュータウン
都市再開発
超高層化時代
シビル・ミニマム

62
64
65
66
67
68
69
70

マイホームと中流意識	71
生計費	87
蒸発	88
タレント議員	90
《ベトナム戦争と国民》	
北爆	92
焼身自殺	93
一〇・二一国際反戦デー	93
騒乱罪	95
新宿駅西口広場	96
反戦フォーク・ソング	97
ソニミ事件	98
米国内のベトナム反戦運動	100

北爆停止と米国	101
ホー・チ・ミン死去	102
佐世保闘争	104
エンタープライズ	105
王子野戦病院	106
七〇年安保前夜	108
《戦争の傷痕》	
長崎国際文化会館	109
特別被爆者制度	112
原爆記録映画	113
戦没動員学徒等の補償	117
北方領土	120
小笠原諸島の復帰	122

独身婦人の声	124
《農村の日々》	
農村の人口減少	127
米価問題	128
農産物輸入の自由化問題	129
《仕事の歌》	
原子力船「むつ」進水	142
炭坑の閉山・縮小	143
炭坑の事故	144
蒸気機関車の廃止	149
国鉄の財政再建問題	150
神話教育の復活	156
《はたらく人々》	

職業病	166
定年延長問題	173
《愛と死》	
老人福祉の問題	202
《病み臥して》	
あらたな病気の出現	219
《四季の移ろい》	
新宮殿落成	246
明治百年記念行事	246
《くさくさの歌》	
歌会始	263
川端康成ノーベル文学賞受賞	280

◆凡例

1 本全集は、昭和元年から五十年までの間に
つくられた短歌を対象として、一般投稿
歌、依頼出詠歌、各種資料からの発掘歌
等々を、選者の選をへて編纂した。

2 収録作品は、作歌年（作者本人の申告もし
くは初出掲載誌発刊年等）によって分類
し、年代順に巻分けを行なった。

3 各巻内は、作品のテーマ、素材により分
類・配列した。また分類ごとに初出作品の
上段に、色刷で編集小見出をつけた。

4 作者名の下に、生（没）年、出典、小題等
を必要に応じてつけた。

・収録作者全員の作者略歴・索引を巻末に
つけた。

・生年または現存（没年）が未詳の場合は
…で示した。

【例】大8…（生年のみ判明）

…昭20（没年のみ判明）

・出典は、原則として編纂部が典拠とした
ものを示した。『…』は歌集、『…』は新
聞・雑誌などを、また（…）内の数字は、
刊行年、刊行年月（日）号を示す。

【例】『形相』（23）（昭和二十三年刊）

『アララギ』（17・2）（雑誌『アラ

ラギ』昭和十七年二月号）

『朝日新聞』（17・12・8）（昭和十

七年十二月八日号）

・二首以上の収録作品で、出典が複数とな
っている場合の表示。

【例】『アララギ』（17・9、10）（九月号
と十月号）

『アララギ』（17・9）…三首（18
・3）…二首（十七年九月号から三

首、十八年三月号から二首）

・必要に応じて、出典の下に原典につけら
れた小題を付した。

【例】『露原』（22）―食生活（歌集『露

原』にある「食生活」という小題の
ついた一連からの抄出）

・必要に応じて、作歌時の所在地、未発表
作の典拠等をへ…内に記した。

【例】『北支にて』（日記より）

（沖修二『阿南惟幾伝』（45）より）

5 戦後の現代かな使用による作品を除いて、
作品の表記は旧かな使用を原則とした。な
お、漢字は原則として新字体を使用し、よ
みがな（ルビ）は編纂部の判断で加減した。

6 作品の下段に色刷で脚注欄を置いた。

・昭和史事項、短歌史事項の解説脚注は、
太字（ゴチック体）で見出をつけた。なお

（…）内は執筆者名。

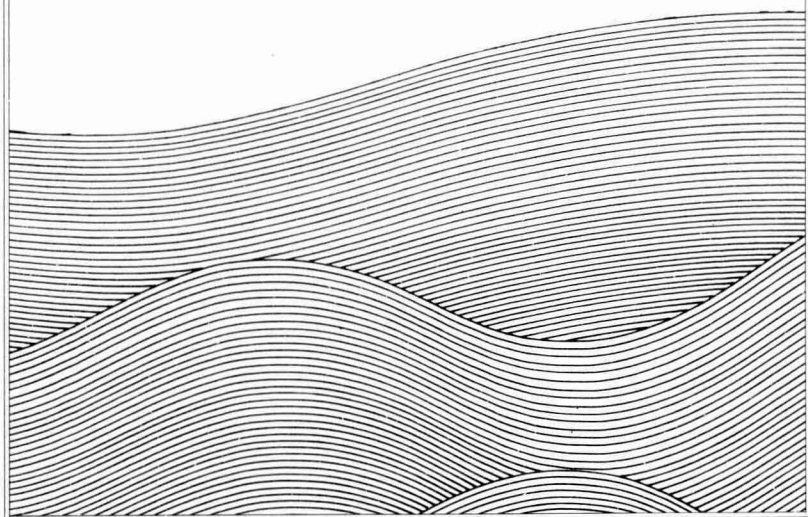
・作品中の難解語、特殊用語、古語、誤解
を生じやすい語などに語注をつけた。

・収録作品につけられた詞書は、必要
に応じて『詞書』と頭につけて脚注欄に引
用記載した。

・検索しやすいように、作品の末尾と該当
する脚注の頭に、*または**をくりかえ
し付して、対応させた。

■ 本巻収録の作品の作者・著作権者で、所在
不明等のため、連絡のとれない方がありま
す。巻末作者略歴・索引の*印を付した作
者がこれに該当しますが、お心あたりの方
は、編纂部まで御一報くださいますようお
願ひいたします。

I



ゲバルトの季節

熊沢正一 大2「アララギ」(44・4)

安田講堂の攻防

拳銃の狙はねば屋上に身を曝らし遊びのごとく火炎壕投ぐ*

岩崎節子 大15「平和への希求」編集委員会編『平和への希求』(45)より

ひとところ人も樹木もあぎやかに浮きいで怒号は炎をあおる

三井八郎 「平和への希求」編集委員会編『平和への希求』(45)より

血まみれの女子学生がうずくまるこの様なこと許されてもよいのか

島田修二 昭3「コスモス」(44・4)

さまざまの角度に映る争闘の安田講堂裸形のごとし

山村展生 大6「コスモス」(44・6)

機動隊遂に東大に入るといへばあかときテレビを点して待てり
思想違ふ故にかくまで憎み合ふや炎の中のその顔見えず

北代達雄 昭6・昭50「アララギ」(44・4)

*火炎壕＝牛乳・コーラ等の壕に、硫酸、燈油・ガソリン等をつめた爆発性の武器。各セクトにより製法は異なる。昭和四十七年五月から施行された「火炎ビン処罰法」によって、罰則が科されるようになった。

ゲバルトの季節 昭和四十二(一九六七)年秋のいわゆる羽田闘争をきっかけとして、昭和四十三年春から全国一六の大学で学園紛争がおこった。その原因は、学費値上げ反対、学園民主化の要求、処分撤回要求、学舎統合・移転反対、学内の不明朗な人事反対などさまざまで、しかもそれらが複合していることが多かった。学生たちは一様に大学の旧秩序解体を呼号し、角材や鉄パイプ、ヘルメットのスタイルで、大学を「封鎖」し、立看板で呼びかけ、「大衆団交」で答弁する教授たちを「ナンセンス」と野次り、大学側の導入する警官隊と衝突した。そこでは学問・教育のあり方に対する根本的な疑問が提起され、いわゆる

火炎瓶投ぐる学生も突き進む警官も冷き放水の下

前田 透 大3「『島と漂流』(50)

淡青旗赤旗とならび吹かれいる塔の時計は停りいる既に

新堂広志 大10「『平和への希求』編集委員会編『平和への希求』(45)より」

棍棒と石と瓦斯弾が乱れ飛ぶかかる怒りを誰にか向けむ

関 とも 大7「『まひる野』(44・2)

ガス銃は重くひびきぬ力抜けて身の落ちゆかん暗さに坐せり

北原弥生 大13「『平和への希求』編集委員会編『平和への希求』(45)より」

ころがれる頭蓋のごときヘルメット灰白し安田講堂の闇

拉致されて学生あらぬ塔の闇ひたひと黒き機動隊充つ

穴沢博子 明37「『春草会誌』(44・3)

次の世代は我が手に拓くと抗いし子ら濡れそぼち引かれゆくなり*

香川 進 明43「『平和への希求』編集委員会編『平和への希求』(45)より」

東京大学をつぶせ大学をつぶせ大学をあらためずに未来あるべしや

「ステューデント・パワー」が旧体制に立ちむかうエネルギーとなつて、明らかなことになった。これらの学生たちは、日本共産党をも敵とし、いわゆる「反代々木」勢力を結集していった。この闘争は国際的な「ニュー・レフト」(新左翼)運動の一環でもあり、また一九六八年は世界中で「ステューデント・パワー」が注目を浴びた年でもあった。「力、強制、暴力」などを意味するドイツ語のゲバルト(Gewalt)の流行が、このはげしい風潮を象徴していた。(原田勝正)

*濡れそぼち＝濡れてびしょびしょになり。

窪田滋次 「アララギ」(44・4)

総長代行も学生代表も判らねど集会は見ゆわが二階より

木村 博 「アララギ」(44・4)

銀杏並木の下より見てゐる教授一人やがて機動隊の中に紛れぬ

山本 清 大15 「コスモス」(44・4)

よろけつつ教場の磔^{いじ}を踏みなづむ老教授の後姿^{うしろ}テレビに映る

黒光武子 大7 「アララギ」(44・5)

時計台あやふしと伝へ来し電話夜の大学に子は戻りゆく

溪 さゆり 大11 「平和への希求」編集委員会編『平和への希求』(45)より

解放講堂^{かいほうどう}いでて三日ぶりに呼べる声 “幾日の交渉に母よ疲れし”と

相沢 節 明35 「一路」(44・3)

時計台に旗押し立てる青年は英雄となりて映さるるはや

成徳勝四郎 大3 「アララギ」(44・4)

時計台上の旗は倒れつテレビの前に安堵とも怒りともつかず疲れき

安田講堂の攻防 東京大学では昭和四十三年一月医学部で登録医制度などをめぐって学生自治会がストにはいり、三月二十六日の卒業式は実施できず、六月五日反代々木系学生が安田講堂を占拠、七月二日反代々木系の全学共闘会議が結成された。この間六月十七日安田講堂封鎖解除に機動隊が導入されたことから闘争は全学にひろがり、十一月一日大河内一男総長以下全学部長が辞任、十二日全学共闘会議は全学バリケード封鎖を宣言、すでに七月二日から再封鎖された安田講堂をはじめ、各施設の封鎖が開始された。そしてこれに反対する民主青年同盟の学生たちとの対立が深まった。総長代行に就任した加藤一郎法学部教授の解決案実施は、翌年一月に持ちこされ、十日民青系・紛争收拾派学生と大学側とは秩父宮ラグビー場で七学部集会を開き、問題解決のための確認書を取りきめ、十四日までに文・医二学部以外各学部のストと封鎖は解除された。しかし他大学の反代々木系学生もはいつた安田講堂の封鎖は依然つづけられていた。(原田)

小尾 登「アララギ」(44・1)

夕暮れし安田講堂の入口にプラカード燃えて雨にぬれをり

三枝昂之 昭19「やさしき志士達の世界へ」(48)

われらの痛み

ここを根拠としたる決意をまうしろの〈刻〉のむこうに確めながら

レポの息 暁^あけちかければななつなるどの海よりも碧くさわだつ*

塔よりもひと息低き屋上の君の黄いろい視野のアジアよ

たたかいの意志つげむとき誰よりも一月の海さわだちている

くやしきはわれの意志とぞ想うとき海はみどりの悍馬のごとし

岩崎章文 昭19「△平和への希求」編集委員会編『平和への希求』(45)より

信号の変らぬをいらいらしておりぬ全学集会が待っているべく**

軍人の父あらばいまなに言うや壁に吊してあるヘルメット

戦争を知らぬ君らと蔑^{さげす}まる二部授業などわれらは受けて

総括に書かねばならぬまた一人バリケードより離れゆきしを*

清水寿夫「早稲田短歌」(44・24号)

安田講堂封鎖解除 大学側は、全学封鎖解除を入試実施の前提条件とし、一月十八日午前七時、八五〇〇人の機動隊を導入、二一カ所の封鎖を解除、午後一時半から安田講堂に対する攻撃を開始した。

機動隊はガス銃、催涙液を使用、学生は投石、火炎ビンで抵抗、午後五時すぎ攻撃は一旦中止された。十九日午前六時、三〇〇〇人の機動隊員が攻撃を再開、正午すぎ機動隊員は講堂内に侵入、学生たちは時計台、屋上で最後まで抵抗を続けたが、午後五時半すぎ全員三七四人が逮捕され(うち東大生は二人という)、全学の封鎖解除は完了した。大学側は二十日評議員会で入試問題を討議、実施を決定したが、加藤総長代行と坂田文相との会談において、文相が入試につきよく反対、最終的には入試中止とまとまった。(原田)

*レポII レポートの略。通報。報告。連絡。とくに非合法の政治活動で用いられる。

**全学集会II すべての学部を網羅した大学全体の学生集会。

*総括II 運動や闘争の経過等をまとめあげる。闘争に参加した学生たちの間で用いられた語。

激しき空の流れが見えたとしてみじめみじめにスクラムは壊さず

中島直子 昭18 〈合同歌集『翔』(50)〉

平穏な統一を祝う明るさを拒む深夜にガス弾あびつつ

ジュラルミンの楯にこづかれ争いしより組む友の腕わななきやまず*

石よりも堅きつぶてを抱きつつ検問たやすく通されている

楯の壁ついに突破しえざりき燃えつきぬまま落つる夕日よ

無言のままこづかれゆきぬ石なき掌に腕伝う雨光らせながら

楯置きて木陰に寄れば若やぐをいつから敵と呼びならいしか

バリケード小さく開けて試すごとき視線の前に口ごもりいる**

伊藤裕作 昭25 〈『早稲田短歌』(44・24号)〉

「機動隊殺せ」武器持たぬ俺煙草三本ふかし黙殺

山田 徹 昭22 〈『早稲田短歌』(43・23号) 二首(44・24号)〉

革マルと書きて終れるアジビラに愛語告げてる奸策もある*

しゅったつはかたき切符を掌^{てのひら}にしびれる汗とこのへるめつと

*ジュラルミンの楯は機動隊員が、出動時に持つジュラルミン製の大きな楯。
わななきやまずはふるえがとまらない。

**バリケードはここでは大学構内などに機動隊の侵入を防ぐために築いた防壁。

*アジビラはスローガンや主張などを書いて人を煽動するビラ。
奸策は悪くみ。

全共闘 昭和二十三年に結成された全学連(全日本学生自治会総連合)は、昭和三十三年六月、日本共産党の指導に反対するグループが分裂し、このいわゆる反代々木グループは、革命的共産主義者同盟指導下の日本マルクス主義学生同盟(マル学同)、社会主義学生同盟(社学同)、日本社会主義青年同盟全国学生班協議会解放派(革マル派)に分裂、さらにマル学同は革命的マルクス主義派(革マル派)と中核派とに分裂、革マル全学連と、中核派、社学同、社青同解放派の三派全学連とが分立した。昭和四十三年には三派全学連は中核系全学連と反帝系全学連に分裂し、日本共産党系の